

尾道市市史編さん委員会事務局だより

# 市史広報 \*第4号\*

## CONTENTS

- 【巻頭特集】 因島棕浦廻船の里
- 【特集関連】 小早川氏と四国征伐の戦利品
- 【トピックス】 大藤忠兵衛旧蔵資料の発掘報
- 【事務局発】 文化財編上巻予告／刊行計画



因島棕浦廻船の勇姿を描く船絵馬 宝暦5年(1755) 因島棕の里ゆうあいランド民俗資料館蔵



今日では静かな海浜集落の棕浦ですが、江戸時代には島内随一、また、藩内でも有力な廻船基地として賑わった歴史が秘められています。港に建つ立派な常夜燈（近海では最大級とされる）や民俗資料館に残る船絵馬（写真上）等は、そうした往時の隆盛を今に偲ばせるものです。

「古は、棕木多しといふ、今も雌雄の大木二本遺れり、広七町、袤十三町、南西山を負ひ、東は、海に面ふ、民産船運を主とし、農業は、たゞ婦女のみ、また隣村より、客作するあり…」  
古くは棕の木が多く、今も雌雄二本の大木が残る。東西七町、南北十三町、南と西側は山に接し、東は海に面する。産業は船運（海運）が中心で、農業は婦女のみで、隣村からの雇われ耕作もある…  
広島藩の地誌『芸藩通志』が記録した江戸時代の因島棕浦の概略になります。当時の人口は「百八十戸、七百四十二人」と同誌にあります。最盛期には三百軒にも上る人家が軒を連ねたと伝説的に語り継がれています。

## 大型の千石船<sup>せんごくぶね</sup>を有した椋浦廻船団

『芸藩通志』では地域別に船の所有状況も記されており、左の表は因島各村のものを一覽にまとめたものです。船数だけを見れば、土生<sup>はぶ</sup>、三庄<sup>みつしょう</sup>、重井<sup>しげい</sup>に続いて椋浦は中程の位置にありますが、船の規模を示す積石数では、1600石の椋浦が最上位に位置しています。1000石を超える船は「千石船」と呼ばれ、1000石は米で約2500俵になり（米俵1石は約2・5俵分で重さ約150kg）、それだけの量を積み込める大型船を椋浦が所有していたことが特筆されます。

因島椋の里<sup>しゅうあい</sup>ゆうあいランド民俗資料館で展示される模型「徳吉丸」は（写真下）、椋浦廻船で活躍した船の一つで、1350石積の船でした。積石数では十分に大きい千石船ですが、椋浦廻船の中では小さい方のクラスになるといえますから驚きます。

地区	船数	最大積石数
土生(現 因島土生町)	86艘	500石
三庄(現 因島三庄町)	76艘	1,200石
重井(現 因島重井町)	49艘	50石
椋浦(現 因島椋浦町)	35艘	1,600石
田熊(現 因島田熊町)	22艘	200石
大浜(現 因島大浜町)	21艘	50石
中庄(現 因島中庄町)	18艘	110石
鏡浦(現 因島鏡浦町)	9艘	500石
外浦(現 因島外浦町)	3艘	600石

『芸藩通志』に見る因島の船舶集計表

椋浦廻船の最盛期は宝暦<sup>ほうれき</sup>〜明和年間<sup>めいわ</sup>（1751〜172）頃とされます。それ以後の文化3年（1806）の記録文書（因島三庄の庄屋・宮家の御用年誌帳<sup>ごようねんしちやう</sup> Ⅱ公用の年間記録）には、尾道の御蔵所から大坂へ運ぶ年貢米輸送で、1700俵積を筆頭に椋浦の大船7艘が、三庄の船（1000俵積）と共に従事したことが確認されます。

椋浦を含む因島の廻船団が往来した範囲は、瀬戸内海にとどまらず、北前船の航路でもある日本海側へも繰り出し、北海道の松前・東北・北陸方面にまで及んでいました。

香川県の金刀比羅宮（こんびらさん）と共に海上安全の守護神として崇敬された大阪府の住吉大社には、廻船関係者から寄進された石灯籠が多く見られます。それらを丹念に調べられた平澤文人の調査によると、広島県内から寄進された中でも椋浦を主体とする「芸州廻船中」<sup>げいしゅうかいせんちゆう</sup>寄進のものがスケールや技巧面において、他をしのぐ逸品であると指摘されています。

◆参考文献『千石松椋之浦』平澤文人著（因島市文化財協会・平成12年）



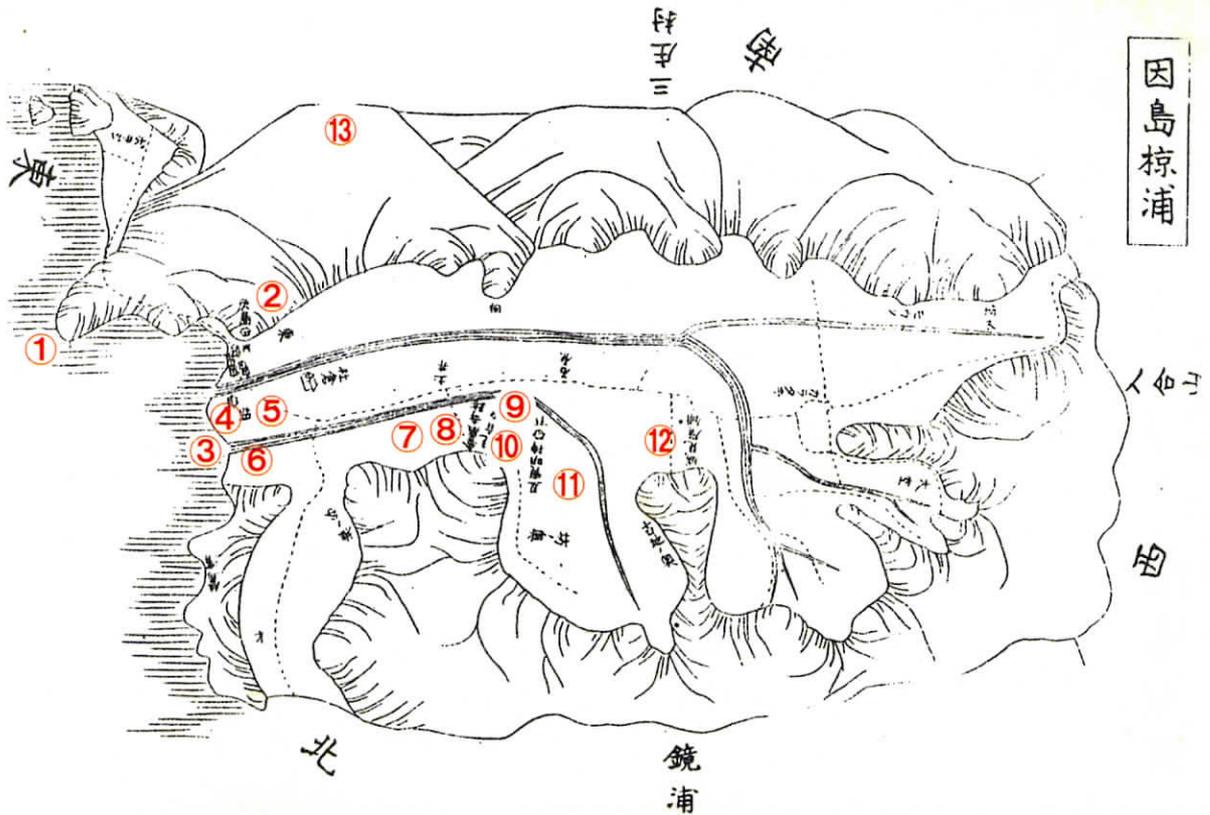
芸州椋浦東屋清次郎の千石船・徳吉丸の模型（因島椋の里ゆうあいランド民俗資料館蔵）

## 千石船と北前船

千石船は「弁財船」<sup>べさいせん</sup>とも呼ばれ、大坂を起点に瀬戸内海から日本海ルートを往来した「北前船」としても知られます。北前船は海の総合商社といわれ、寄港地でその土地の産物を買入れて積込むと同時に、他国の産物を売りさばくというビジネス・スタイルで、船主は単なる輸送業者ではなく積載する商品の荷主でもありました。尾道からは、特産品である塩や量表、酢から、鍛冶製品や石材などが積込まれ、北海道や北陸からは昆布<sup>にしん</sup>、鱈<sup>たら</sup>の海産品、肥料や米等がもたらされました。



引き札に描かれた千石船（大藤忠兵衛「引き札」コレクションより）



『芸藩通志』巻九十五所収「因島掠浦」の地図上での史跡地点



【上段左→】▲船繋岩の一つ（磯辺先端に突き出た岩・地図①）▲巖島姫巡幸伝説地の一つと伝える巖島神社（地図②）▲毎年8月15日に執り行われる県無形民俗文化財の法楽踊り（地図③浜辺）▲胡（エビス）宮跡に建つ碑（地図④）▲徳川幕府軍艦美嘉丸の船将を務めた掠浦出身の青木忠右衛門の碑（地図⑤）【中段左→】文化2年（1805）に掠浦廻船業者が金比羅大権現に奉納した常夜燈で尾道石工山根屋源四郎尚政の作（地図⑥）▲中世戦国頃～近世江戸期の古墓群（地図⑦）▲廻船関係者の名が棟札に確認される金蔵寺観音堂（地図⑧）▲掠浦の氏神社・良神社と尾道石工作の狛犬（地図⑨）【下段左→】▲船中安全と刻む良神社の常夜燈（地図⑨）▲市天然記念物の掠の木（地図⑩）▲旧幼稚園舎建物を利用した民俗資料館には廻船関係及び民具類等の民俗資料を収蔵展示（地図⑪）▲一ノ城に拠った小早川氏の碑と五輪塔群。周辺を「城見屋敷」と呼び、上掲『芸藩通志』にも記載（地図⑫）▲城見屋敷から望む鶴ヶ峰。頂上平坦地に一ノ城が築かれた（地図⑬）。

良神社に隣接した金蔵寺（現在は観音堂だけが遺る）には室町時代初期の明徳2年（1391）に書経された「版本大般若波羅蜜多經」が伝わりました。この大般若経は、元は近江国の三井寺（滋賀県大津市）にあったもので、これを伊予河野氏に連なる石川通昌が入手し、通昌が施主となつて伊予国新居郡の磯野宮（愛媛県西条市・伊曾乃神社）に寄進された来歴を秘めます。それが何故棕浦の地にもたらされたのか？— 両地を繋ぐ交流の歴史が皆無の中で、唯一の可能性として指摘されているのが、豊臣秀吉と長宗我部元親が激突した四国征伐（四国平定戦）です。

天正13年（1585）6月、阿波へ秀吉の弟・秀長と甥の秀次率いる豊臣本隊6万、讃岐へ黒田・蜂須賀連合軍と宇喜多秀家率いる備前・美作勢2万3千が上陸侵攻、

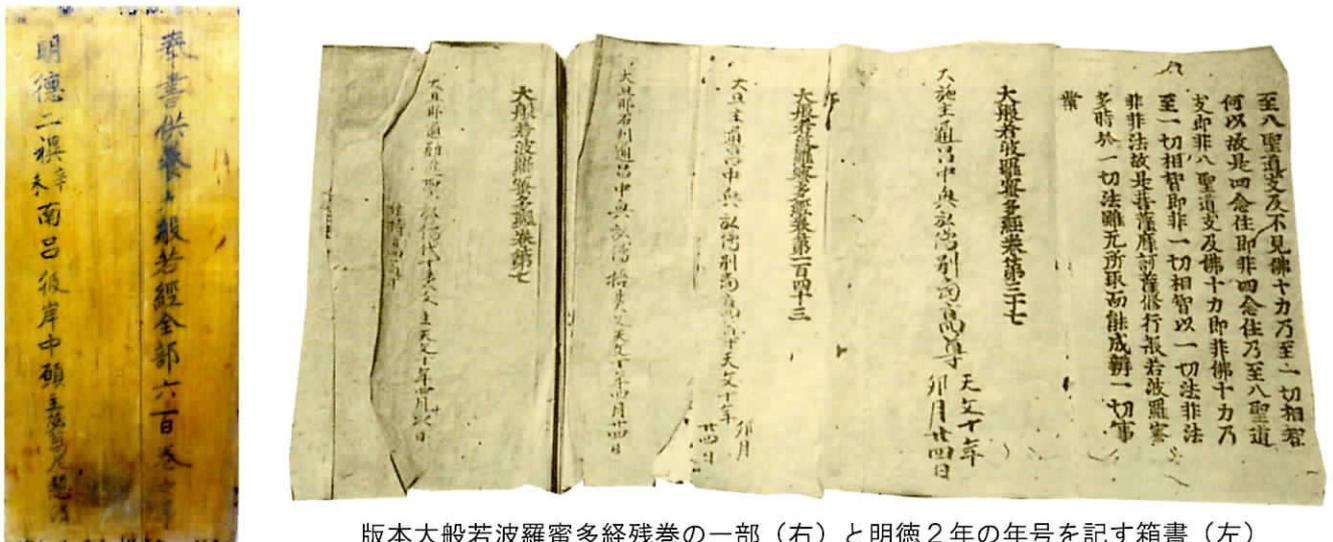
## 小早川氏と四国征伐の戦利品

伊予方面には毛利配下中国勢3〜4万が今治に上陸しました。伊予攻略軍の第一軍を率いたのが小早川隆景で、この時、因島村上勢の動きは史料上確認されていませんが、棕浦の小早川氏（下のコラムに詳細）が隆景勢の旗下で従軍し、戦利品として持ち帰ったものではないかというのです。

伊曾乃神社の来歴では、四国攻めで兵火に包まれ、社殿社宝一切を失ったとあり、この混乱状態の中で大般若経が拾い出され、小早川側の手によつて保護されたとの見方です。隆景本人も伊予を領有した後、今治の大浜八幡宮に所蔵された「紙本墨書大般若経」（応永13〜17年・1406〜10間の書写）を三原市久井町の久井稻生神社へ移し寄進しています（広島県重要文化財）。

参考文献 片山清「大旦那石川通昌中興大般若経由来上」

『伊豫史談』300号記念特大号、平成8年



版本大般若波羅蜜多經残巻の一部（右）と明徳2年の年号を記す箱書（左）

## 棕浦の小早川氏

良神社から西へ進むと、「城見屋敷」と呼ばれる界隈があり、その一角の畑の中に、古びた五輪塔群と共に「蒲刈小早川家先塋域」と刻む碑（写真右）が建ちます（全景は3頁写真中）。五輪塔群は棕浦にあった小早川氏の墓所とされ、城見屋敷はその屋敷地を示すものとされます。

棕浦の小早川氏は、室町幕府から地頭職を任命されて因島へ来着したのを始まりとするようで、因島村上氏以前に因島を支配していたと見られています。城見屋敷から南に遠望される鶴ヶ峰山頂に、小早川氏の居城となる一ノ城（市史跡）が築かれました。

関ヶ原戦の後、小早川氏は蒲刈島（安芸郡蒲刈町・現呉市）へ移り、以降は蒲刈小早川氏と称されました。



おおとうちゆうべい

# 大藤忠兵衛 旧蔵資料発掘報

# 市史編さん事務局トピックス

明治期に尾道市議会副議長、尾道商業会議所議長も務めた尾道商人・大藤忠兵衛の旧蔵資料が、ご子孫の大藤幸子さんから市史編さん委員会事務局へ寄贈されました。

千光寺山東斜面（長江）に位置する大藤家の茶園（別荘庭園）土蔵に眠っていた資料群は質量共に目を見張るものがあり、当時の広告チラシである「引き札」が101種136枚（内、尾道関係は27種34枚）、国内外の絵葉書が1357枚というコレクションが確認されました。

中でも市史編さん上で重要視されるのが明治期の行政文書群で、市制施行以前の尾道町時代を含む役場及び議会に関する文書がまとまった形で遺されているのは大変貴重であり、近代編を埋める有益な資料として期待が寄せられます。



上：呉服商であった大藤忠兵衛が出した引き札  
下：引き札コレクションの一部



## 市章の原形となる町章

尾道町時代の行政文書の中には、市章（市のシンボルマーク）の原形となる町章に関する規則が図案入りで示されています。

明治24年（1891）の議案には、  
 市章規則として尾道町役場の徽章が定められています。赤色二本線は現在の市章とほぼ同一ですが、線の幅が二本とも均一という点が今とは異なります（現在の市章は下が太い）。また、市長や助役らが用いる提灯にも徽章のラインが入れられ、役職によって太さが微妙に分けられています。

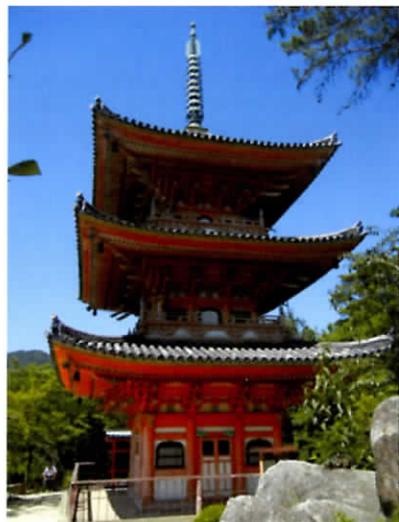


明治24年（1891）の尾道町議会文書に記載の町章

上から尾道市水道局長江浄水場配水池・美ノ郷町の猪子迫古墳石室内部・山波のウバメガシ。



右から国宝向上寺三重塔(瀬戸田町)・西国寺三重塔(西久保町)傍の大型五輪塔。



## 大詰め迎える文化財編上巻

新市史の第一巻を飾る文化財編上巻の制作が、いよいよ大詰めを迎えようとしています。

文化財編は建造物や史跡・天然記念物等で構成される上巻と、仏教美術や民俗文化財等で構成する下巻に分かれ、上巻が30年度末に、下巻が32年度にそれぞれ刊行予定にあります。

上巻では、第1章の総論に始まり、中世から近代に至る文化財建造物、古墳や城跡等の史跡、名勝、天然記念物と全5章で構成され、同カテゴリにある指定文化財を網羅しています。その内には、未指定ながら文化的価値を有するものも一部でピックアップされており、市史編さんが新たな文化財の掘り起しと再検証の機会ともなっています。

## 『新尾道市史』刊行計画

市制施行120周年にあたる平成30年度を振出しに、40年度までの11年計画で、新市域を網羅しての『新尾道市史』を編さんします。全11巻の刊行スケジュールは次の通りです。

平成30 (2018) 年度	文化財編 上巻
平成32 (2020) 年度	文化財編 下巻
平成33 (2021) 年度	史料編 近代・現代
平成34 (2022) 年度	史料編 古代・中世
平成35 (2023) 年度	民俗編
平成36 (2024) 年度	地理編
平成37 (2025) 年度	通史編 原始・古代・中世
平成38 (2026) 年度	通史編 近世
平成39 (2027) 年度	通史編 近代
平成40 (2028) 年度	通史編 現代

### WANTED

#### 史資料や情報をお寄せください

古文書や古写真(写真絵葉書を含む)、古地図、尾道の話題を報じる古新聞など、市史編さん委員会事務局では、幅広い分野において尾道市に関わる史資料を収集しています。また、無形の伝承(地域に伝わる言い伝えや独特な慣習、祭礼芸能等)についても収集対象となります。もし皆さんのお宅や周辺で、あるいは地域で、そうしたものが発見される場合は、事務局へご一報下さい。史資料については複製(写真撮影・コピー)を取らせていただくのみで、現物については速やかにお返しさせていただきます。情報提供は下記の事務局連絡先までお願いします。お電話での受付時間は平日9:00~16:00(以降は文化財係0848-20-7425へお願い致します)

### 編集後記\*2019.1

新年を迎え、新たな気分でお過ごしのことと思います。皆さま、お変わりございませんでしょうか。

さて、今回の市史広報は、廻船基地として賑わった因島にスポットを当てております。創刊号の御調町からはじまり、旧尾道市街、向島と広く尾道市のことを紹介してまいりました。改めて歴史と文化の香り豊かな尾道市を見つめなおすきっかけとなれば幸いです。

そして、この度は大藤忠兵衛旧蔵資料の発掘報にも注目です!美しい引き札と市章の来歴をご覧ください。(I.H.)

※『市史広報』は年に2回程度の発行を予定しております。みなさんの様々なお声や情報をお待ちしております。